
spade of joker

明智つばめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s p a d e o f j o k e r

【Nコード】

N 3 1 3 4 S

【作者名】

明智つばめ

【あらすじ】

蘭が好きなお姫様のお話を絵本風に書いています！

蘭が姫、新一は王子、園子と和葉はメイド、平次は門番などお馴染みキャラが総出演です

もちろん、快斗と青子も登場します！！

よろしければご覧下さい！

プロローグ

むかしむかしあるところにスピード王国とハート王国という二つの国がありました

二つの国は仲が良く王子と姫は許嫁と言われていました

しかし

スピード王国は王子が10才になったときに盗賊によって支配され隣国から攻められ滅びてしまいました
ハート王国の人々は自分達の身を守るのが精一杯で姫は王子の安否を知ることも出来ない状態でした

風の噂で王子だけは生きていると聞きましたが定かではありません…

それから7年後…

17歳になった姫は今も王子を想い続けているのです

プロローグ（後書き）

こちらはプロローグです！

これからキャラが登場します。

よろしくお願ひしますm（）
（）
m

搜索(前書き)

設定

蘭
姫

新一
王子

和葉・園子
メイド

平次
門番

搜索

蘭姫は自分の部屋から窓を眺めながらメイドに話しかけています

和葉「どうかしました？」

蘭「ちょっと昔のこと思い出しちゃって…」

和葉「昔のことってスピード王国の王子様のこと？」

蘭「うん…」

生きてるって聞いたんだけどね…」

和葉「私もその噂は間違っていないと思うけどどこにいるかまでは聞いてへんからなあ」

蘭「あのね…」

和葉ちゃんにお願いがあるの！」

和葉「何？」

蘭「王子を探してほしいの！」

和葉「探すって！」

私はいいけど蘭姫様心配やし…」

蘭「私には園子もいるし大丈夫よ！」

だから兵士さんにでも協力してもらって…

お願い！」

メイドはため息をつきながらしょうがないなあと笑いました

和葉「いいよ！」

探してみる！」

和葉は部屋を出ていきました

向かった先はお城の門の前です

和葉はあくびをしながら門番をしている男に声をかけました

和葉「なあ、協力してくれへん？」

平次「協力って何をや！」

和葉「姫様に王子探してくれって頼まれてんよ！」

平次「王子を探す〜!？」

そんな無茶な!」

平次は笑うと和葉はちよつと怒りながらこたえました

和葉「無茶かもしれんけど頼まれたんやから
やらないわけにはいかんやろ?」

平次「まあ、そやな…

面白そうやし門番より楽しいやろ!

しゃあないからいくわ!」

和葉「おおきに!

でも探す言つてもどこから探せばええんやろ?」

平次「西の魔女…東の魔女…」

和葉「えっ?」

平次「あやしいねえちゃんらしいけどその二人に聞いてみるしかないなあ…」

和葉「西の魔女…東の魔女…?」

平次「その二人やったら何か知ってるやろ？
先に西から行ってみよか！」

平次はそう言うと歩いていきました

和葉「ちょお！まって〜！」

後から和葉が追いかけて行きます
その様子を窓から姫が眺めていました

蘭「お願いね…二人とも…」

こうして王子探しは始まりました

しかし

これはまだ序章

先はまだまだ長いかもしれません…

搜索（後書き）

如何でしたでしょうか？

王子の搜索が始まりました！

関西弁難しい…

次回は場所を移して快斗と青子が登場予定です！

ご感想、ご意見、評価お待ちしておりますm()m
明智つばめ

盗賊（前書き）

設定

青子：酒場の娘

快斗：盗賊

小五郎：王様

妃：王妃

中森警部：酒場のマスターと警備員

盗賊

ハート王国の端にスピード王国から来た盗賊が集まる酒場がありました

酒場の看板娘の青子とお尋ね者の快斗がカウンターで話をしています

青子「やっぱりお城に乗り込むなんて無理よ！」

快斗「そんなことね〜よ！」

俺だって盗賊の端くれだぜ？

ハート王国に残されたスピード王国最後のお宝なんてちよろいって
「！」

青子「そうやって余裕かましてると痛い目見るわよ！」

快斗「そうかあ？

ってか誰だよ！」

俺の手配書作ってこの店に貼ってるのは！」

青子「だって成功したらお尋ね者だも〜ん！」

快斗「青子が犯人かよ！」

もっという写真使えよ！」

青子「いいじゃない！」

アイス食べながらピースしてる写真！」

快斗「お子様っぽくて嫌なんだよ！」

青子「アイスが好きな時点でお子様でしょ！」

快斗「なに〜!!！」

二人が言い合いを始めるとギャラリーは盛り上がりました
いつものことですが長々と続いています

やっと冷静になった頃、快斗は地図を広げて店の皆に言いました

快斗「俺は明日スピード王国最後の宝を盗みに行く！」

わあああとギャラリーは沸き立ちました

成功したら快斗はこの店の英雄になれること間違いなしです

快斗「そう言えば、青子のお父さんまだお城の警備任されてるのか？」

青子「うん！」

お店より盗賊からお宝守るのが天職なんだって」

快斗「へえ」

青子「快斗はお父さんに捕まっちゃえ！」

快斗「つんだと」！」

青子「まあ、がんばってね」

快斗「言われなくても頑張るよ」

快斗はそう言っつて酒場を出ていきました

快斗は宝を盗めるのか？

その頃、お城では警備に力が入っていました

中森「盗賊に襲われたら生きているかもしれないスピード王国の王

子に何も言えん！
徹底して守れ〜！！」

青子の父は明日に快斗が来るなんて知らずに警備を固めているのでした

そこへハート王国の王と王妃が入ってきました

小五郎「警備の方はどうですか？」

中森「今のところ何も問題はありませんが常に狙われている宝ですから日々強化しております！」

妃「自信がお有りのようなら大丈夫ね…」

明日は嫌な予感がするから警備をもっと強化してくださいさる？」

中森「かしこまりました〜！」

青子の父は王と王妃に向かって敬礼をすると去っていった

小五郎「明日は嫌な予感がするってなんだよ！」

妃「胸騒ぎがするのよ…」

宝が盗まれるとか何かあるような…」

小五郎「何かあるような…ねえ…」

俺は感じねえけどなあ」

妃「それは貴方がうといからじゃなくって？」

小五郎「そうか？」

まあ、盗まれるかなんてわかんねえし、とりあえず警備を強化するしかねいな！」

妃「ええ…」

何もなければいいんだけど…」

快斗のお城のお宝を盗む計画が実行されるのは明日の夜
お城の住人達の心配を横目に計画は着々と進んでいるのでした

盗賊（後書き）

快斗と青子の言い合いは書きやすいです。
私が子供っぽいからですかね（-.-;）

次回は平次と和葉の魔女訪問編です！

魔女とはだれか…

お分かりですよ？

ご感想・ご意見・評価お待ちしております！

明智つばめ

魔女（前書き）

ここまでのあらすじ

平次と和葉は蘭姫王子の捜索を依頼されました

とりあえず、東の魔女と西の魔女を訪ねることにしますが…

魔女

平次と和葉は西の魔女と東の魔女を訪ねるために森を歩いていました

平次「先に西から訪ねた方がええやる！

西の魔女って言われとるねえちゃんには会ったことあるけど東はな
いからなあ」

和葉「えっ？

平次「西の魔女に会ったことあるの？」

平次「ああ、クールなねえちゃんや

そいつが王子かくまってるって噂があつてなあ
前に気になったから聞いてみたんや」

和葉「そしたら？」

平次「かくまってるわけないって追い帰されてのっ」

和葉「だつたら今回もその人のところ行く意味あるの？」

平次「あるに決まっとるやろ？」

そのねえちゃんが居場所は知らんとしても王子に手え貸したんやら！」

和葉「なんで、手え貸したって分かるん？」

平次「目撃したやつがいるんや

城が燃える中二人の黒いローブにフード被ってる奴が脱出するのを…顔がちらつと見えたらしいけどそいつはその魔女のねえちゃんやって話や」

和葉「そんな知らんかったわ」

平次「門番やりながら町の人と話聞いてたらぎょーさん情報は集まったで！

ほとんどは噂やったけど魔女がいることは確実や！」

和葉「そやね、会ってみるしかないね！」

二人は木漏れ日のさす明るい森の中に小さな家が建っているのを見つけました

平次と和葉は扉に付いている鉄製の呼鈴を鳴らしました
コンコン、コンコン

魔女「何か…？」
扉が開いて出てきたのは小学生くらいの赤みがかった茶髪の少女でした

平次「王子のこと姫さんに言われて探しとんのや！
あんた何か知つとるやろ？」

哀「…入りなさい」
哀は中へ案内しました

暖炉の前には火にかけようとしていたらしい怪しげな液体が入った壺があったり、薬の瓶が棚に所狭しと並んでいたり、怪しげな本が並んでいたりにしています

哀は二人にお茶を出すと平次と和葉の向かい側に座って言いました

哀「何か知ってるかって質問だけど…
私は7年前にあの火の中から王子と逃げたわ
だけど行方は知らない…」

平次「なんで一緒に逃げて居場所知らんのや！」

哀「こつ言われたのよ…」

7年前、城から逃げる途中のことでした
哀『はやくしないと貴方まで死ぬわよ!』

新一『分かってるよ!』
『

二人は燃え盛る城から逃げてハート王国の前まできました
新一『俺はここまでだ…』

哀『どういうこと?』

新一『俺が生きてるって分かったら今度はハート王国が狙われるぜ
そんなことするわけにはいかねえ
だから…
時が来たら戻るって伝えてくれ!』

哀『ちよつと!』

王子は哀の目の前から姿を消しました

和葉『やっぱりかっこええなあ!王子様!』

平次『そうかあ?』
要するに逃げたんやで?』

哀「そうね…」

逃げたは逃げたけどあの時7歳よ！
行く宛なんてないはずなのに…」

和葉「そやなあ…」

7歳で行く宛あるんか不思議やなあ…」

哀「ハート王国の果てに発明家と名乗ってる博士が住んでるからその人がかくまってるんじゃないかと思ってるんだけど…」

平次「ほんなら、そいつ訪ねたらいつちよあがりやな！」

哀「それは甘いわ…」

平次「なんやと？」

哀「博士のもとに行くには時間がないわ…
行くなら東の魔女を訪ねるのね…」

和葉「なんで？」

哀「予言があるからよ…」

双子の星がとか言う予言が明日の日付だって聞いたわ」

和葉「それって関係あるの？」

平次「アホ！大有りや！

東の魔女の予言はよう当たるて有名やからなあ！

明日何か起こるんやったらいく価値あるで！

もしかしたら王子が帰ってくる予言かも知れんしなあ…」

和葉「そやったらはよ行かんと！」

哀「ええ、早い方がいいわよ…」

東の魔女は暗闇がお好きみたいだから…」

平次「どういう意味や？」

哀「とりあえず、私は魔女って呼ばれてるけど彼女と別世界の人間…

私が医者なら彼女は魔女…

気をつけるのね…」

哀はそう言つと平次と和葉を家から追い出し思いっきり扉を閉めま
した

平次「なんや！あのねえちゃん！」

和葉「とりあえず、

はよう行こう！」

日がくれてまうし……」

二人は東の魔女のもとへ歩き出しました

魔女（後書き）

今回はほぼ平和でしたが次回も平和です！

その次は快斗や新一が登場予定です！

2日か3日に一度の更新ですがこれからもよろしくお願いしますm

（――）m

ご感想・ご意見・評価お待ちしております！

明智つばめ

予言（前書き）

あらすじ

平次と和葉は西の魔女（哀）に言われて東の魔女を訪ねることにしました。

西の魔女とは違い東の魔女のいる場所は薄気味悪くて…

予言

和葉と平次は西の魔女に言われて東の魔女を訪ねるために怪しげな森を歩いていました

和葉「なあ、平次！

さっきのところと違ってここ気味悪くない？」

平次「東の魔女ってねえちゃん趣味悪いんちゃうか？」

和葉「そやかて…

あつ…あれ…」

和葉が指をさした先にはいかにも魔女がいそうな古い洋館が建っていました

平次「あれやな、東の魔女の家は！」

和葉「ええ！あの洋館に行くん？」

平次「しゃあないやろ！

あの洋館に住んでるかもしれんのやから！」

平次と和葉は歩いていくと洋館の鉄の呼び鈴を鳴らしました
コンコン コンコン

「どなた様でしょうか？」
そこには醜い男が立っていました

平次「東の魔女に会いとうてきたんや」

「そうですか…
私はこの家の執事をしております
どうぞお入りください」

二人が通された部屋はシャンデリアがついているものの薄暗い部屋
で魔物のような牛の飾りや奇妙な絵が余計に気味悪さを強調させる
部屋でした

「こちらでお待ち下さい
お嬢様をお呼びしてきます」

執事は丁寧にお辞儀をして去っていった

和葉「やっぱり気味悪いわ！
中にもっと趣味悪いし…」

平次「アホ！聞こえたら何されるか分からんぞ！」

二人がヒソヒソ話していると執事につられて美しい少女が入ってきました

紅子「私に何か聞きたいって方は貴方たち？」

平次「そうや！」

紅子「何が聞きたいのかしら？」

紅子は執事を下らせると平次と和葉の向かい側に座った

平次「予言を聞きにきたんや！」

俺らは王子を探しててなあ

西の魔女から予言に関わってるかもしれないって聞いたんや！！」

紅子「そうね…」

予言には王子が関わってるかもしれないわ」

『双子の星が揃う時

国の果てから現れし英雄
国の危機を救うであろう』

紅子「これが予言よ！

英雄が王子かどうかは分からないけど明日の夜までにお城に戻らな
いと二度と会えないかもしれないわよ…。」

和葉「二度と会えない？」

紅子「そう…」

行方不明の王子様にね…。」

平次「それって死ぬって意味か？」

紅子「そこまでは知らないわ」

和葉「王子様狙われてるんやったらはよ帰らんと…！」

平次「そやな！

ねえちゃんおおきに！」

二人は慌てて洋館を出ていった

執事「お嬢様：いいのですか？
もう1人の存在を知らせなくて…」

紅子「ええ、時がくれば分かることよ
もう一人の彼は私に手を貸してほしいとは思ってないわ」

紅子は外の消えかかっている平次と和葉の後ろ姿をいつまでも見つめていました

平次と和葉がお城へ向かっているころ
お城の屋根に怪しい人物がいると報告されました
それは王子に似ているような男だったと目撃者は言っていました

快斗「これで準備はばっちり！
あとは明日の夜を待つだけだな…」

快斗は荷物を回収しお城を離れました
その姿をボロボロの洋服と帽子を目深にかぶった男に見られている
とも知らずに…

予言（後書き）

ほんのちよつとだけ快斗が登場しました！

次回はとうとう快斗が動き出します！！

あともう一人！ボロボロの洋服と復活といえは…

あの名探偵の登場です

次回もよろしく願います！！

ご感想・ご意見・評価お待ちしております。

明智つばめ

到達（前書き）

予言の日、夜のお話です！

到達

予言されている日の夜はお城の警備も気合いが入っていました

中森「今日は交代で警備をするぞ！

予言があった日だからな」

妃「よろしくお願いしますね」

中森「はい！」

この時、妃と一緒にいた蘭姫は不安そうな顔をしていました

そして…

夜も更けた頃でした

警備員に紛れていた快斗の警備の順番がまわってきました

プシュー

快斗はもう一人の警備員を催眠スプレーで寝かせました

快斗「これでお宝が拝めるってわけだな」

快斗は宝物の入ったガラスケースに手をかけました

快斗「こりゃ〜豪勢な王冠だなあ」

快斗は丁寧に王冠を持ってきた布袋に入れました

その時です！

蘭「それは盗っちゃダメよ！」

快斗「あっあはは

お姫様何をおっしゃるんですか？

私は警備を強化するために中森隊長に頼まれただけですよ！」

蘭「そんなわけないわ！

さっきその隣の警備員を寝かせるの見てたもの！」

快斗「あちゃ〜

見てたのかよ…！」

蘭「もう、逃げられないわよ…！」

快斗「逃げられないのはそこでコソコソ見てる奴じゃないのか？」
快斗はトランプ銃を構えました

蘭「えっ？」

パシユッ

トランプが刺さった柱の先に誰かが立っています

快斗「隠れてないで出てこいよ……」

「そうだな……」

ボロボロの服と帽子を被った男がいました

「その宝は俺の大事なものだからな！」

蘭「あっ……」

蘭姫はいつの間にか涙を流していました

蘭「しっ……新一？」

新一「ああ！でもまだ他の奴にバレるわけにはいかねーんだ！
黙ってるよ……」

蘭「うん！」

快斗「すぐにバレる嘘なんて戯言にすぎない…

俺は乙女チックなラブロマンスに付き合ってる暇はないんでね！」

新一「つんだと！」

快斗「まあまあ

スピード王国の王子は今度はハート王国とその宝を守るんだな！」

そこへ平次と和葉が息を切らしながら駆けつけました

和葉「えっ？王子様が宝を盗んどるよ！」

平次「つんなわけないやろ！」

蘭「その人は泥棒よ！」

快斗「泥棒じゃなくて盗賊と言って頂きたいね
でわごきげんよう」

快斗は蘭姫の手にキスをすると煙幕をはって逃げて行きました

平次、和葉、蘭の三人が煙からようやく解放されて辺りを見回します

蘭「あれ？新一は？」

和葉「えっ？王子様がここにおったの？」

蘭「えっ？いや…

何でもないよ…」

和葉「そっか…」

平次「盗まれてしまったなあ、宝…」

蘭「うん…

私のせいだ！」

平次「いや、姫さんのせいじゃないで！

あの王冠には仕掛けがあつてなあ！」

和葉「仕掛け？」

平次「あれは被るものやのうて鍵なんや！」

和葉「鍵？」

平次「だから役割が分からん奴にはいらへんガラクタヤ」

蘭「装飾は宝石じゃないの？」

平次「あの宝石はスピード王国の本当の宝を示すヒントなんや！
まっ、あの泥棒が分かるか謎やけどなあ」

和葉「平次はその宝のありかしてるの？」

平次「しらんけど知ってるやつが1人おるやろ！」

蘭「新一……」

平次「そうや…」

もう捕まえてるかもしれへんで泥棒さんを…」

窓からは朝日が差し込もうとしていました

平次は予言のことを考えていました

双子の星とは多分、王子とさっきの泥棒のことや…
だとしたら

あの王冠を盗まれるのが分かっていたとしたら…

平次「和葉！お前は姫さん守れよ！」

和葉「えっ？どこいくん？」

平次「ちよつと急用や！」

和葉「じゃあこれ持ったとき！」

和葉は大事そうに持っていたクロスのネックレスを投げた

和葉「お守りや！」

平次「悪いなあ……」

平次はそう言うと上着のポケットにネックレスをしまいました

王子が危ない！

平次はスピード王国に向かって走り出しました

到達（後書き）

今回は盗みと新一登場でしたが次回は冒険チックになるかと思いません！

更新は1日置いて16日の予定です！

よろしく願いますm（）（）m

ご感想・ご意見・評価お待ちしております！

明智つばめ

破滅（前書き）

あらすじ

新一と平次は盗賊の快斗を追いかけていきました
盗賊達の本当の目的は…？

破滅

新一王子は盗賊の快斗を追いかけてスペード王国城跡にいました

新一「こんなところ来たって何にもないぜ」

快斗「あつたらどうする？」

新一「やっぱり知ってたみたいだな」

快斗「ああ！ここには見てはいけないお宝が眠ってる」

新一「だから盗賊はその宝を欲しがった！」

快斗「今も欲しいやつはいるぜ？でもハート王国が守っていたから
手がつけられなかった…」

だからここに…」

そう言った途端、快斗は背後に誰がいるのに気がつききました

「それはこれか？」

そこには平次が立っていました

快斗「なに〜!?!」

平次「こいつは渡せんなあ!

王子!はよう持って逃げるで!」

新一「おう!」

平次と新一は取り戻した宝を持って走り出しました

快斗「おい!ちょっとまってよ!」

そんな快斗の言葉を背にハート王国との境に近づいた時でした
平次が息を切らしながら新一に言いました

平次「なあ…

見つけたらあかん宝ってまさか…」

新一「そのまさかさ…

だからスピード王国は滅ぼされた」

7年前のスピード王国…

王妃「そんなもの作って何の役に立つのよ!」

王「これが完成しなければこの国はなくなる…
完成してもなくなるかもしれないがね…」

王妃「誰に言われたのよ!そんな…」

王妃は新一を抱えて泣き崩れました

王「他の国には手出しはさせない!

もつともスピード王国の国民はハート王国に移住させることに決ま
っている」

新一「じゃあ僕たちはどうなるんですか?」

王「…新一…」

お前は蘭姫とハート王国に恩返しをしなきゃいけない
だから何があっても助かるんだ
そして奴らから宝をまもれ!」

新一「宝って…?」

王「一緒に来なさい」

新一王子は王に連れられて城の奥にある扉を入れていきました
そこには長い長い階段があり、下るにつれて真っ暗闇でした
王は持っていたランプに火をつけると重そうな扉を開けました

王は扉の前で王冠を外し何かをしているのが見えました

ギイイイ

扉が軋む音がして扉が開きました
そこにあっただのは…

新一「これって…」

王「人の命を奪う残酷な代物さ」

新一「爆弾…」

王「ああ、でも人間が操作しない限り起動はしない」

新一「なぜこんなものを作ったのですか？」

王「ある人に言われたんだよ…」

他の国を守りたいなら犠牲になれってな…」

新一「だからって！」

王「国民は大丈夫だ

あとハート王国にも危害は及ばない

これは私への挑戦状だ

お前はこれが起動しないように手を尽くすんだ

受け入れ先は博士に頼んである！」

新一「犠牲者を出さない方法はないんですか？」

王「奴等は私と王妃の命と引き換えに国民の命を奪うと言っている
私達より国民のが大切だ

これ以上奴等の犠牲者を増やさないためにも…

新一…

分かってもらえたか…？」

新一「はい…」

王「タイムリミットはあと2日だ…」

新一「あと2日…」

新一と王は無言で部屋を出ると地下室を後にしました

戻って7年後…

平次「だから滅びたんか…」

新一「ああ、まあ実行犯の狙いは国民をパニックに陥れて金品を盗賊に盗ませるのが主だったらしいが王が先手を打ったから何も盗めなかつたんだ」

平次「じゃあ何で火い放たれたん？」

新一「口封じさ…」

王と王妃がいなくなれば爆弾の秘密を知っている奴はいなくなるからな…」

平次「なるほどなあ…」

お前が7年待った理由って…」

新一「再び7年後に会おうという手紙があったからさ…」

新一王子はポケットからクシャクシャの紙切れを出しました

『7年後にまた会おう

その時はお互いに王子として…』

平次「なるほどなあ…」

7年後までお前を探してる盗賊に会わんように生きてるよって意味にもとれるなあ」

新一「だから身を隠してたんだよ…」

平次「あの爆弾また起動するんやないやろな？」

新一「分からねえけど時間がないのは確かだ」

平次「時間がないって…」

新一「もしこの王冠を手に入れられなかったら奴等はハート王国を狙うだろうな…」

平次「そんなもんあげたらよかつたんちゃうか？」

新一「バーロー！

どっちにしる奴等は次はハート王国を狙う気だ！
7年も念入りに計画を練ってな！」

平次「はよ知らせんと！」

新一「じゃあ、頼むな…」

俺はやることがあるからよ！」

平次「分かったわ！

生きて会おうな…」

新一「お前もな…」

新一と平次は拳を突き合わせるとお互いに行くべき場所へ去って行きました

平次はハート王国城へ

新一は…
行くべき場所へ…

破滅（後書き）

シリアスな感じになってますが最後をラブラブにするためですので
ご了承下さいm(´`´) m

次回は快斗と青子、平次、蘭が登場予定です！

よろしく願いします！

ご感想・ご意見・評価お待ちしております

明智つばめ

先手（前書き）

あらすじ

スペード王国の宝が爆弾だと分かった新一と平次はそれぞれの役目に向けて動き出します。

蘭と快斗の行動も気になるところですが…

先手

平次はハート王国城に着くと真つ先に王妃のもとへ向かいました

平次「この時間帯やとあの王様酒盛りしてる頃やからなあ…」

平次は思いつきり王妃の部屋の扉を開けると王妃は顔色を変えて近づいてきました

妃「その顔は…」

7年前の秘密を知ったのね…」

平次「お妃はんはやっぱり知ってたんか！」

妃「ええ、スペード王国からの国民を受け入れた後に…」

国民受け入れの時は治安悪化のためとしか聞いてなかったわ
実際に治安は悪化してたしね」

平次「そやったら俺が言うことも分かるんやろ？」

妃「ええ、もちろん…」

スペード王国の本当の宝は爆弾…」

盗賊は7年かけて起動させようとしている…」

平次「そうや！これをどうのがれるかや…」

妃「そうね…」

とりあえずあの人には知らせておくけど蘭には言わないでちょうだいね」

平次「ああ…あのねえちゃん無茶するかもしれんしなあ」

ところ変わって蘭姫の部屋では園子と和葉が心配そうに蘭姫を見ていました

園子「蘭姫！もしかして盗賊が来た夜に何かあったんじゃない？？」

蘭「…会ったのよ…」

和葉「会った？誰に？」

蘭「新一に…」

和葉・園子「ええ〜!？」

園子「どこで会ったのよ!」

蘭「盗賊が宝を盗んだ現場にいたのよ!」

和葉「蘭ちゃん!あれは盗賊やって言ってたよ!」

蘭「盗賊とは別よ…」

もう一人いたの…」

和葉「そやったんか…」

きいつかへんかったわ…」

園子「だったら生きてるんだからいいじゃない!」

蘭「そうだね…」

でも…嫌な予感がするの…」

その頃、新一は自宅に帰っていました
お城とは全く違う大量の本が渦巻く塔に入ると大声で言いました

新一「博士！ただいま！」

博士「おお、新一か！」

新一「例のもの出来てんだろーな？」

博士「もう少しで完成じゃ！」

あれを作らされた時に作っていればこんなことにはならなかったの
にのう…」

新一「バーロー！」

そんなこと言ったらキリねーよ！

そつえばあの女も協力すんのか？」

博士「哀くんか？」

協力するとは言っておったが今日は用事があるとか言っておったぞ
！」

新一「用事ねえ…」

あいつ裏切る気じゃねーだろーな」

博士「そんなわけないじゃろう！
協力すると言っておったし！」

新一「まあ、いいけどよ！

とりあえず俺はちょっと調べものしてるな」

新一はそう言つと自分の部屋への扉を開けました

盗賊の集まる酒場…

一人の少年の背中に銃が突きつけられていました

「快斗…おめえ絶対盗ってくるっていったよな？」

快斗「あ…言つたかも？」

「ぶざけてつと死んでもらうぜ」

快斗「はっ…ははは…

「

「あの宝がね〜と7年間無駄なんだよ！」

快斗「だったらたてめえで盗ってこいよ！」

「なにい!?!」

青子「まあまあ、まだお頭には報告してないし大目にみてあげれば？」

「娘さんは快斗に甘くね〜か？」

青子「気のせいよ！」

「こんなヤツの肩持つの気が知れないもん」

快斗「お前なあ！」

その時です！

異様な雰囲気店内に漂いはじめました

「おっ…お頭…」

快斗「あっ…父上…」

頭「快斗…失敗したそうだな…
残念だ…」

快斗「まだチャンスはありますし！」

頭「17年育ててやったのに仇で返すとは…
もう一度チャンスをやるから今度こそ成功しなさい」

頭はそう言って快斗を壁に追いたてると壁にナイフを突き刺しました

頭「今度成功しなかったら…どうなるか分かってるな！」

快斗「はいはい！
今度こそ成功させます！」

頭は快斗の言葉を聞いて頷き静かに言いました

頭「今度の作戦は先手必勝…
7年間待った計画を今こそ実現させる日が来た」

頭の声は酒場に響いた…

戦争はこれからだと言いつつ盗賊たちの叫び声と共に…

先手（後書き）

次回から物語の山場へ突入予定です！！

そのため制作時間をいただきたいと思えます

更新日の催促は受け付けておりませんのでご了承くださいませ
す。

よろしく願います！

策略（前書き）

補足

新一王子の両親（スペード王国王と王妃）は優作さんと由希子さん
ではありません

もちろん盗賊のお頭も盗一さんではありません
遅くなりましたが補足致します。

策略

午後10時、ハート王国城より20発の花火が咲く

それは宣戦布告の合図…

盗賊たちは一斉に城の最上階を目指して走り出しました

中森「奴等の中に入れな〜!!」

隊長の中森が叫ぶと荒れ狂う盗賊共と兵隊達の戦いが始まりました

「快斗〜！お前はやく上を目指せ〜!!」

快斗「りよ〜か〜い！」

自分が戦っていた兵隊を仲間に任せて快斗はやっと城へ入りました

そこには不審な目で見つめる蘭姫が立っていました

快斗「〜ごきげんよう！お姫様！」

蘭「貴方たちは何をするつもりなの？」

快斗「知ってどうするつもりなの？」

蘭「ふざけないで！」

快斗「知ったところでいいことないぜ……」

蘭「どっという意味よ！」

その時、快斗の背後に短剣が向けられました

「この国を潰せばもう敵はいないってか？」

快斗「はっ……ははは！」

何をご冗談を……王子様……」

新一「蘭！はやくここを出るんだ！
なるべく遠くへ！」

蘭「えっ？遠くへって……」

新一「詳しく話す時間はない！はやく！」

新一が怒鳴ると蘭姫は覚悟を決めたのか快斗を避けて入口を出る時でした

蘭「新一！もう…いなくならないでよ…」

蘭姫が去り際にそう言うと新一は笑みを浮かべて言いました

新一「ああ…はやく片付けて追いつくから心配すんな！」

蘭姫はその言葉に頷くと城の入口から走り去りました

快斗「妬けるね〜」

新一「バーロー！っんなんじゃね〜よ！」

快斗「では、お姫様も逃げたことだし本題にいきますかね」

新一「本題？」

新一は短剣を快斗の喉元にちらつかせました

快斗「俺を殺せば仲間に伝わるシステムになってる
つまり…俺が起爆装置ってことだ」

新一「なに!？」

快斗「さっき上げた花火は宣戦布告ってわけだ」

新一「お前達は…なにを…」

新一は持っていた短剣を快斗の喉元から離すと二、三步下がりました

快斗「なにをしようかって?そりゃ王子様の交代とハート王国以外との接触を拒んでいたスペード王国を消すためさ」

新一「なんだと!」

快斗「本当は7年前に成功していなければいけなかった
だが、王子は魔女に救われて助かったんだ
魔女はそのあと行方不明だしな…」

新一「お前…もしかして…」

快斗「ようやく気がついたか!スペード王国の王子は双子だった
でも生まれてすぐに盗賊に誘拐された
それが俺だよ!」

新一「だからってハート王国を巻き込むことないだろ！」

快斗「なんで巻き込んだかって？」

あの宝を作らせたのはハート王国だからだよ！」

新一「そんなわけない!!！」

快斗「理由は護身用だとさ

他の国に攻められる前に先手を打とうと考えたそうだ…

もう終わりなんだよ…

王子様？」

快斗が火をつけたマッチを床に落とすと炎が広がっていきました

新一「お前!!死ぬ気か？」

快斗「俺の役目はお前を足止めすること…

もう仲間がお室にありついでるころだろうな…」

新一「甘いな…」

快斗「なに!？」

新一「爆弾はとっくに解体したよ
お前らが作戦練ってる間にな！」

快斗「そんなはずないだろ！
さっき確認したらそこに…」

新一「あれはフェイク！

阿笠博士が作ったハリボテさ！」

快斗「くっそ〜！」

快斗はすぐ後ろにあった螺旋階段をのぼっていきま
した
後ろには追いかける新一がいます

その後ろからは炎が迫っていました

最上階

小五郎「英理…俺達が残ったらまた狙われる…」

妃「そうかもしれないわ…

あの爆弾を他の国に侵略されやすかったスピード王国にすすめたの
は私達ですもの…」

そう言って王と王妃は留まることを決めたようでした

平次「あかん！あんたらが死んだらスペード王国の二の舞やぞ！」

小五郎「お前……」

平次「しつかりせえ！

はよ逃げな！

今みですつと後悔してたんならこれから先はそれを伝えて行けばええやないか！」

妃「そうね……」

生きてても役目はありそうね……」

そうして城のヘリポートまであがると王と王妃、平時を乗せたヘリコプターは飛び立ちました

平次（王子……無事でいるよ……）

その頃、やっと森まで逃げきった蘭姫は小さな家を見つけました

家のドアを叩くと少女が出てきました

蘭「あの〜…」

哀「貴方、お姫様ね…

入りなさい…」

蘭「あっ…ありがとうございます…」

哀「お茶でもどうぞ…」

魔女は蘭姫にカップを差し出しました

蘭「どうもありがとう…」

あの…新一を助けた魔女って…」

哀「ええ、私よ…」

身を隠すために魔法薬で体を小さくしたの
これなら弟子って言えば本人だって分からないわ…」

蘭「そう…ありがとうございます…助けてくれて…」

哀「お礼なんていらわないわ
私は王に頼まれて助けたただけだし…」

魔女は窓の外を覗くと顔色を変えました

蘭「どうかしたの？」

哀「お城が…燃えてる!？」

蘭「えっ？」

蘭姫は魔女の横から窓の外を見ました
遠くに火の手が上がっていました

蘭「行かなきゃ…
お城には新一が…」

哀「貴方は残りなさい!
死にたいの？」

蘭「やっと会えたのに…」

蘭姫は涙で濡れた顔を両手で抱えました

哀「分かったわ…
生きて連れて帰るからここにいなさい」

蘭「うん…約束よ…」

哀「ええ…」

魔女は緑色の奇妙な粉の入った瓶をとると暖炉へ投げ入れました
魔女は蘭姫に微笑むといつの間にか部屋から消えていました

蘭「新一…無事でいて…」

蘭姫の想いは届くのでしょうか…？

策略（後書き）

投稿が遅くなりまして申し訳ございませんでしたm)——(m
体調が優れない中書いたので文章がおかしかったらご連絡下さい
さて、今回は新一と快斗の戦いに決着が着く予定です！
ご感想・ご意見・評価お待ちしております！

明智つばめ

信頼

快斗と新一はハート王国城の最上階で睨みあっていました
階下には炎、逃げ道は窓ひとつ…

新一「もう逃げ場はないな…
どうするつもりだ？」

快斗「逃げ場がないのは俺だけじゃないぜ！
お前もだよ…」

新一「ああ…そうだな…」

快斗は一足先に窓辺に腰掛けました

新一「お前はまた繰り返すのか？」

快斗「いや、それはやめとくよ…
もう恨んじやいねえしな」

新一「本当か？」

快斗「ああ…、まああの姫を泣かせたらもう一度勝負してやってもいいぜ！今回は降参だ」

快斗はニヤッと微笑すると窓の外へ身を放り投げた

新一が窓に駆け寄ると快斗はハンググライダーで空へ羽ばたいていました

煙が最上階までまわり始めています

新一「俺も…終わるか…？」

すると遠くから声がしました

哀「終わりたいなら終わっていいわよ…」

新一「お前…」

新一は煙を吸いすぎて意識が薄れていきました

新一「なんでここ…ここ…」

哀「世話が妬ける王子様ね…」

新一が倒れると魔女は緑色の奇妙な粉が入った瓶をまわり始めた炎の中に放り投げると二人は部屋から消えました

新一が目覚めるとそこは魔女の家のベッドの上にいました

蘭「新一…よかった…」

蘭姫は泣き崩れました

新一「バーロー…」

生きてんのにないてんじゃね〜よ…」

蘭「だって…本当に死んじゃうかと思ったんだから…」

新一「っんなわけね〜だろ?」

哀「あら、私がいなかったらどうするつもりだったの?」

新一「わりいな…」

哀「ちょっとは反省したらどう?」

新一「反省?何を?」

哀「もう私には手に終えないわ!
はやく連れて帰ってくれない?」

蘭「ごめんね」

哀「貴女が謝ることないわ、今度は王子が逃げないように首輪でも
つけとけば?」

蘭姫が魔女の言葉にクスクス笑うと王子は安心しました

新一「お前こそ、もう隠れる必要ないんじゃないか?」

哀「そうね...それはそのうち...」

新一「そのうち?」

王子の問いに答える前に魔女は部屋から出ていきました

一年後…

建て直されたハート王国城、屋上庭園から蘭姫は街を眺めていました

蘭「平和が…嘘みたいだなあ…」

新一「蘭姫！ここにいたんですね！」

蘭「あれ？どうしたのその格好…」

新一「何か変ですか？」

新一はスペード王国にいたときは騎士の格好だったが今は王子の格好をしている

蘭「そんなことないよ！
似合ってる！」

蘭姫が笑顔を向けると新一王子は蘭姫をお姫様抱っこして庭園を後にしました

蘭「ちょ…ちょっと…
下ろして…」

新一は国民が集まるのが見えるバルコニーに出ると蘭姫に向けて口に指を当てる仕草をしました

そして…
大声で叫びました

新一「蘭姫とこの国を守っていく準備ができた！この国の王として
！」

蘭「えっ？それって…」

新一「ああ、結婚してくれ…」

蘭「新一…」

新一王子は蘭姫を下ろすと国民に微笑みながら言いました

新一「姫を…幸せにします！」

国民は旗を振りながら歓声をあげました

二人の後には微笑む王と涙ぐむ王妃

国民の中には和葉や平次が手をふっているのが見えました
その中に元の姿に戻った魔女もいました

平和は待ってやってくるものじゃない…
つくるものなんだ…

国民の中に混じって青子と一緒にいた盗賊はそう呟くと人混みの中に消えていきました…

信頼（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございました。

英国の結婚式をみて続編が浮かぶかもしれませんが今回は最後に快斗がかっこよく締めてくれたのでここで終わりにします（笑）
ご感想・ご意見・評価お待ちしております。

明智つばめ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3134s/>

spade of joker

2011年10月8日20時59分発行